神的なる「焦点」
― ホフマンと動物磁気とナポレオン

坂　本　貴　志

序

「動物磁気」、あるいは「磁気催眠術」と訳されるMagnetismusは、フランツ・アントン・メスマー（1734－1815年）が病の治療法として開発して、革命前夜のパリで貴族やブルジョワ、庶民の間で大流行した。E.T.Aホフマン（1776－1822年）は、オペラ『ウンディーネUndine』（1816年）作曲のかたわら、この「動物磁気」に関心を寄せて『磁気催眠術師Der Magnetiseur』（1814年）を書いたが、それはヨーロッパ侵略戦争に乗り出したナポレオンが、ホフマンが当時いたドレスデンを占領していた頃のことである。作品集『ゼラーピオンの兄弟たちDie Serapions-Brüder』（1819－21年）の中に収められた『不気味な客Der unheimliche Gast』（1819年）もまた、ナポレオンのエルバ島脱出と百日天下を物語の背景としながら、やはり「動物磁気」を主題としている。ホフマンはさらに『自動人形Die Automate』（1814年）の中でも「動物磁気」にふれるが、その登場人物であるフェルディナントとルートヴィッヒが『作家と作曲家Der Dichter und Der Komponist』（1813年）の中で偶然再会するのは、ナポレオンに対する解放戦争の舞台となった街においてである。このようにホフマンが繰り返し取り上げる「動物磁気」は常にナポレオンとの関わりを持たされている。ホフマンはナポレオンとその戦争に関して決して浅くはないつながりを持っている。ホフマンはナポレオンの侵略戦争のせいで司法の職を失ったし、彼の住んでいたドレスデンはナポレオン対同盟国軍の攻防の舞台となり、ドレスデン郊外の歴史的決戦の場に累々と横たわる死傷者たちの光景はホフマンに強烈な印象を与えた。ナポレオンという、ヨーロッパの歴史の主役をホフマンはじかに体験したと言える。そのナポレオンをホフマンが「動物磁気」と関連づけるのにはいかなる意味があるのだろうか。本稿はその考察である。

メスマーとメスメリズム

メスマーに由来するためにMesmerismusとも呼ばれる「動物磁気」の概要をまずは見ておこう。メスマーは1734年にボーデン湖畔の町に生まれ、ウィーン大

学に医学を学んだ。『惑星の影響についてDe planetarum influxu』(1766年)というタイトルの論文で学位を得て、これが「動物磁気 magnétisme animal」に関する彼の理論の出発点となっている。その中で彼はニュートンの万有引力の原理(1665年)を応用して、天体が「万物の隅々にまでゆきわたっている流体fluideを通じて、さらに生物をかたちづくる全組織にたいして、とりわけ神経系にたいして直接、作用を及ぼしている」[1]との論を展開した。引力によって生じる潮の干満のような周期的現象が有機体においても起こり、動物のからだが天体や地球の作用をこうむるというこうした特性を、メスマーは後に「動物磁気」と名付けた。神経系における不調和は病の原因となるが、彼が「一般作用体 Agent général」と呼ぶものの働きかけが調和を回復するとメスマーは『動物磁気発見のいきさつ』(1779年)の中で述べている[2]。「一般作用体」としてメスマーは磁石そのものを「流体」を導くために用いたが、これは「動物磁気」を物理的な磁気と混同させる誤解を多く招いた。メスマーの説は当時の医学界にはほとんど受け入れられなかったが、パリで成功した彼の診療所は大変に賑わい、その治療方法も、様々な理論的変更を受けた上ではあるものの多くの信奉者を得た。

メスマーの診療所の特殊な内装と装置はとりわけ興味をかき立てる。そこは装飾を施した家具が置かれ、分厚い絨毯が床を覆い、窓には厚手のカーテンが引かれて、まるで居心地の良いサロンのようであった。部屋は薄暗くされ、香水の薫りが満ち、壁には占星術を主題にした絵が描かれて、四方から囲むように大きな鏡が据えられてある。部屋の中には「磁気桶」と呼ばれる、磁気化された水を瓶詰にして並べて収めた桶があって、その桶からは鉄の棒が伸び出ている。患者はこの棒を自分の患部に当てる一方他の患者たちとともに指をつないで磁気桶の周囲に輪を作り、その場で演奏されるグラス・ハーモニカの妙なる調べに身を任せつつ、瞑想にふける。すると患者の中にはヒステリックな発作の症状ーこれを「分利 Krise」と呼ぶーを見せるものがでてきて、患者は特別な処置室へと運ばれて、メスマーと助手による処置を受ける。メスマーは患者たちをこのような発作や催眠状態に導いてから、患者の神経に蓄積した過度の緊張をカタルシス的にほぐすことで様々な病の治療にあたった。

メスマーの「動物磁気」には、万物に普遍的に作用する引力と、磁気が力と方向性をもって遠隔的に作用する働きからのアナロジーが見て取れる。このアナロジーは万物を類比的かつ階層的秩序のもとに捉えようとする古い思考方法と基本的に同じ性質をもっている。古代へと遡ることのできるこの思考方法のルネサンスにおける中継点には例えばパラケルススがおり、彼は星辰からのさまざまな力

[1] メスマー(本間邦雄訳):動物磁気発見のいきさつ、キリスト教神秘主義著作集16　近代の自然神秘思想(教文館)1993、290頁。
[2] 同上、292頁参照。

を捕らえてその卓越した力を人間の中にもたらすことができると考えた。こうした魔術をパラケルススは『大いなる天文学 Die grosse Astronomie』(1537－38年)の中で次のように記している。

「天上の諸力を媒体(メディウム)の中へもたらし、この媒体の中で天上の諸力を働かせるという点に魔術の本質がある。媒体とは中心のことであり、中心とは人間である。したがって天上の力は人間によって人間の中にもたらすことができるのであり、この人間の中では、特定の星位(コンステラチオーン)において可能となるこうした天上の力が現実に働くのである。よって、魔術がこうした諸力を運び入れたところの人間の中では、こうした諸力が由来するのとまさしく同じ星が、同様の神秘(セークレータ)と秘密(アルカーナ)を備えて生まれいずるのである。」[3]

パラケルススのこの言葉の中にはミクロコスモスとしての人間とマクロコスモスとしての宇宙との照応が明確に現れており、この照応を現実にする術が魔術として捉えられてある。パラケルススのこのふたつのコスモスのイメージをメスマーもまた受け継いでいるのであり、メスマーの場合、この照応を連鎖する関係として表現する鍵が「流体」となり、パラケルススの「魔術」は啓蒙の時代に相応しく「動物磁気」という言葉に置き換えられたとみなすことができる。

こうしたアナロジー的思考方法そのものの祖型を求めてヨーロッパ文化の歴史的な流れをさらに遡るならば、メスマーの「流体」は例えば、いわゆる「ヘルメス文書」の中における、神と人間の中間的存在であるダイモーンに繋がっていくだろう。導師ヘルメス・トリスメギストスが弟子に教えを伝授する形式で書かれた匿名の作品である「ヘルメス文書」はおよそ前３世紀から後３世紀ごろにかけてエジプトで成立し、その一部となる『ヘルメス選集 Corpus Hermeticum』がルネサンスの時代にマルシリオ・フィチーノによってギリシア語からラテン語に翻訳されて流行をみた。この選集の第十六書では神を頂点とする階層的秩序と連関が次のように記されている。

「このような訳で、神は万物の父、太陽(ヘーリオス)は造物主(デーミウールゴス)、世界(コスモス)は造物のための道具です。叡智的本質(ウーシア)は天界を、天界は神々を支配し、ダイモーンは、(一方で) 神々の下に位置づけられているが、(他方で) 人間を支配しています。これが神々とダイモーンの一団です。」[4]

---

[3] Paracelsus: Sämtliche Werke nach der 10bändigen Huserschen Gesamtausgabe (1589-1591) zum ersten Mal in neuzeitliches Deutsch übersetzt von Dr. Bernhard Aschner. Bd.4, Jena 1932 (=Fotomechanischer Neudruck der Originalausgabe 1926-32, Anger 1993), S.501.

[4] 荒井献＋柴田有訳：ヘルメス文書（朝日出版社）1980、416-418頁。

「太陽(ヘーリオス)は造物主(デーミウールゴス)」とあるのは、太陽が叡智的すなわちイデア的世界と被造物の感覚的世界との両方に連絡しながら、神の創造的活動の流出する起点としてここでは考えられてあることによる。イデア的な叡智的世界(コスモス)の下の階層レベルに感覚できる「世界(コスモス)＝宇宙」が存在し、この宇宙の最も上位のレベルである天界に太陽と星辰といった神々があって、この天界そのものは叡智的世界に依拠する。次に天界が神々を支配し、神々がダイモーンの上に位置するという形で、万物の父である神から叡智的世界、天界、神々、ダイモーン、そして人間へと階層的秩序(コスモス)が構成されて、全ては互いに連鎖するように結ばれあうものとして考えられている。ダイモーンは星辰である神々の配下にそれぞれ置かれつつこれらに仕えて、「作用力(エネルゲイア)」[5]として人間に働きかけるという。

「すなわち、彼らは私たちの魂を自分に好都合に作り変え、かき乱すのであり、そのために私たちの神経、髄、静脈、動脈、そして脳にさえ巣食い、事もあろうに内臓にまでも浸透しているのです。」[6]

「作用力」としてのダイモーンが、星辰の影響のもと、人間の神経系に働きかけるという思考は、言葉は違えども、メスマーの「流体」が表現している世界と根本のところで一致すると言って良いだろう。この意味でメスマーの「動物磁気」は、啓蒙主義の時代相応の装いをまとってはいるものの、世界をひとつのコスモスとして眺め、あらゆる存在を連鎖するものとして類比的に捉えようとするアナロジー的な思考方法によって、ヘルメス的伝統と呼ばれるヨーロッパの知的系譜に明確に連なっているとみることができるのである。

さて、メスマーの「動物磁気」が以上のような知的背景を持つにしても、彼の術が現実の病の治療にあたって成功を収めたという点が、当時の人々の耳目を集めたのだった。「動物磁気」はパラケルススの言葉が表現するような一種の魔術だったのだろうか。この磁気催眠術の特徴のひとつに、催眠状態に入った患者と磁気催眠術師との間で成立する「ラポール Rapport」と呼ばれる共感関係の状態がある。このラポールが成立している状態で磁気催眠術師による治療やマッサージが有効に働くのであるが、このラポールにおいていかなるメカニズムが働いているかについては、メスマーと弟子たちの間でも意見が分かれている。メスマーは無論、このラポールにおける治療の力点を動物磁気の操作に置いているのであるが、しかし例えば、バルバランなる弟子は磁気催眠術師のもつ意志と信仰が治療の主要な動因であるとみなして、ラポールの催眠状態をスピリチュアルな神秘体験であるとしてそこに治癒の原因を見ようとした。またピュイセギュールという弟子

[5] 同上、412頁。
[6] 同上。

は、メスマーの動物磁気を重視する物理的立場とバルバランの精神主義とを融合する形で、磁気催眠術師の主導的役割を重視しつつも、患者が肉体的に陥る催眠状態そのものがもつ治療的価値を強調した。彼は催眠状態の患者に問いを発し、患者が抱える心の葛藤を表出させ、暗示をかけながら、治癒へと導く方法をとった。ピュイセギュールのラポールに対する解釈と方法は、フロイトたちが後年採用するヒステリー患者に対する治療法を先取りしたものとみなすことができる。[7] フロイトとブロイアーによって報告される『ヒステリー研究』の中でフロイトは、催眠状態の患者に暗示をかけ、文字通り「手当」をするし、彼は患者とのラポールによって「無意識」の考察へと導かれることになる。いずれにしても、ラポール、あるいは「動物磁気」との関わりで生ずる「催眠状態 Somnambulismus」では、人間の肉体と精神についてこれまで知られていなかった不可思議で不気味な力が実際に働いていることは認識され、それがいかなる事態であるのかを解釈しようと人々は引きつけられたのであり、ホフマンもその一人であった。

手法

これからホフマンのいくつかの作品に登場する「動物磁気」と「磁気催眠術師」の意味を読み解いていこうとするのだが、作品の取り扱い方について一言述べておかなくてはならない。先に名を挙げたおのおのの作品は、『カロ風幻想作品集 Fantasiestücke in Callo' s Manier』(1814−15年) や『ゼラーピオンの兄弟たち』という作品集の中に織り込まれてある。ホフマンは作品を孤立させるよりは、それらをゆるやかにつなぎ合わせて全体として絵を構成するモティーフのように扱い、作品集という枠の中に収めた。絵となる作品集を描く手法は一貫していて、それはそれぞれの作品集のタイトルをになうエッセイなり物語なりで説明されている。たとえば『カロ風幻想作品集』の場合、巻頭に収められたエッセイ『ジャック・カロ Jaque Callot』(1814年) の中で、「作家の内なる夢幻的な魂の世界に、日常の生の姿形が現れるとして、彼がこの姿形を、自らの内なる世界に現れたときに帯びていた輝きに包んで、見慣れぬ奇異な装いをさせたように表現する」[8]ときの手法が「カロ風」と説明される。また『ゼラーピオンの兄弟たち』の場合は、『隠者ゼラーピオン Der Einsiedler Serapion』(1819年) という物語の中で、「我々の目の前の出来事をとらえるのがただ魂だけであるとするならば、魂が起こったと認めるものがやはり実際に生じたのだ」[9]と述べられる。そこでは、自らを殉教

[7] Vgl. Sigmund Freud/ Josef Breuer: Studien über Hysterie. Frankfurt a. M. (Fischer) 1970, S.18.
[8] ホフマンの著作からの引用は, E.T.A. Hoffmann Sämtliche Werke in sechs Bänden. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1985ff. による。以下この全集からの引用は巻数と頁数のみを記す。Bd.2/1, S.18.
[9] Bd.4, S.34.

者と妄想する隠者が彼の魂にとっての現実のみを表現するという点で、表現をおこなう者の模範となっている[10]。ゼラーピオン的手法も、カロ風もともに、これらの手法に則る作品の出来映えは、作家が内面に映ったイメージをそれがもつ輝きとともにいかにして外へとつかみだすかにかかっている。ホフマンが「動物磁気」と「磁気催眠術師」を繰り返し表現するのは、ホフマン個人がそれらのモティーフを自らの内面でもつ輝きのままに取り出そうと幾度も格闘した証とみなすことができる。また『磁気催眠術師』の中では、夢が現実の再構成的なドラマであるとする解釈が紹介される。これと同じように、おのおのの作品がホフマンの内的真実の再構成であるとするならば、その真実は、様々な作品にまたがる形で現れているだろうし、真実を構成する要素が任意に組み合わされて全く別なる姿形をして、それぞれの作品の中に登場しているかもしれない。それゆえ、ホフマンにとって「動物磁気」と「磁気催眠術師」が帯びていた輝きをつかみとるために、彼の作品群を自由に横断しながら、考えを進めていきたい。

ホフマンと「動物磁気」

「動物磁気」そのものを主題としたホフマンの物語は二つあって、『カロ風幻想作品集』に収められた『磁気催眠術師』と『ゼラーピオンの兄弟たち』の中の『不気味な客』である。前者は1813年の執筆で、後者は1819年に『カロ風幻想作品集』の第二版を出す際『磁気催眠術師』を少々改めたのがきっかけとなって執筆がなされたと考えられている[11]。それぞれの作品の概要を説明しておくと、『磁気催眠術師』は副題にあるとおり、「ある一家の出来事」を巡っている。舞台は老男爵と娘マリア、息子オトマー、そして一家の友人である画家の住む城である。医師アルバンはオトマーのたっての願いで彼のもとを訪れた際、マリアを一目見るなり、彼女を密かにラポールの関係に引き入れる。この共感関係は、これまでメスマーとの関連で眺めたのは異なる一種の超能力によって成立している。彼はマリアにはとりたてて印象を残すことなく一旦は去ってゆくものの、彼女の方はその日以来ヒステリー性の失神のような症状に悩まされながら消耗してゆき、「夢や幻覚の中に常に一人の美しい、威厳のある男が登場する」[12] ようになる。この男が他ならぬアルバンであり、彼は物語の中では詳しくは語られない不可思議な遠隔操作によってラポールの関係を維持し続け、医師としてマリアのもとに再び現れてからは、彼女の病を磁気催眠術によって治療する。こうしてマリアはアルバンとのラポールで強い支配下におかれた結果、従軍している許嫁のヒュポリー

[10] Vgl. Ebd., S.69.
[11] Vgl. Ebd., S.1496.
[12] Bd.2/1, S.207.

トに思いを寄せるときも常にアルバンを意識せざるを得なくなる。その後マリアは帰還したヒュポリートとの結婚式に臨むものの、ヒュポリートに祭壇の前で抱きしめられようとしたとき、突然死んでしまう。アルバンは逃亡し、ヒュポリートはオトマーと決闘をして倒れ、またオトマーはナポレオン戦争のいずれかの会戦に参加して罪を償うように壮絶な死を遂げる。男爵も心痛がもとで亡くなり、こうして一族もろともが死に絶えるという悲劇的物語が『磁気催眠術師』である。

『不気味な客』ではフォン・G大佐一家が舞台となり、その妻と娘アンゲーリカ、養女のフランス人女性マルゲリト、アンゲーリカの恋人モーリッツ・フォン・R騎兵大尉、そしてフォン・G大佐の恩人のシチリアの伯爵が登場する。ここで磁気催眠術師役を演ずるのはシチリアの伯爵であり、その出自は山師カリオストロ伯爵を連想させるが、彼はアンゲーリカに求婚して失敗すると、磁気催眠術の弟子へと仕立て上げたマルゲリトの助力を得て、アンゲーリカとラポール的関係を結ぶべく努める。伯爵の指示でマルゲリトは、眠っているアンゲーリカに夜ごと忍び寄っては伯爵の名を彼女の耳にささやき、おりおり伯爵自身も立ち会って、眠っているアンゲーリカにじっとまなざしを注ぐ[13]。アンゲーリカはこのようにして正常な眠りから催眠状態へと導かれて、磁気催眠術師である伯爵とのラポールが取り結ばれることになる。一方この間、フォン・G大佐とモーリッツは、エルバ島を脱出したナポレオンによって再開された戦争のために戦地に赴き、大佐は無事に帰還するものの、重傷を負ったモーリッツは意識不明のままとある城—後でそれがマルゲリトの親族のものと判明するが—に運ばれそこで軟禁され、ここでシチリアの伯爵から不可思議な遠隔操作を受けて、モーリッツを恋するマルゲリトとのラポールを強制されそうになる。伯爵とラポールの関係にあるアンゲーリカは、モーリッツが戦死したとの誤った報せを受けとり、伯爵との結婚を決意するが、その婚礼の日に彼女は突然催眠状態に陥り、この状態で譫言のようにしてモーリッツの帰還を予知する。アンゲーリカが催眠から突然目覚めて城の外へと出て行くと、そこにモーリッツが帰ってきており二人は劇的に結ばれる。同じ頃伯爵は、かつて彼が磁気催眠術によってラポールに取り込んだ女が結婚式の時に突然死したように、今度は自分自身の方が突然死する。こうして『磁気催眠術師』とは反対の喜劇的大団円で幕を閉じるのが『不気味な客』である。二つの物語はともにナポレオンの戦争を背景に持ち、そしてホフマンの執筆時期の現実のナポレオンの盛衰が物語の中に影を落としている。『磁気催眠術師』が書かれた1813年頃ナポレオンはドレスデン包囲網を打ち破る最後の軍事的天才を発揮していた。対して『不気味な客』が書かれた1819年の時点でナポレオンは既に没落している。磁気催眠術師のラポールの成功は、現実のナポレオンの興隆と歩をあわ

[13] Vgl. Bd.4, S.767.

せているのである。

遠隔操作によるラポール、催眠状態での予知、ラポール関係にある登場人物たちの突然死というように、二つの物語の中で「動物磁気」はホフマンの幻想による彩りを帯びた特異な輝きをはなっている。その輝きの中で、磁気催眠術による患者の疾病治癒という観点は背景に後退し、むしろ磁気催眠術師が患者役に相当する人間と取り結ぶラポールそのものがホフマンの関心の対象として前景に登場してきている。「動物磁気」を磁気催眠術師がどのように理解しているのかは、『磁気催眠術師』のアルバンが同志に宛てたつぎの手紙の中に明らかであり、彼はラポールにおいて成立する共感関係を支配関係へと転用する点に重きを置いている。

「生存(エクシステンツ)とはすべて闘争なのであり、闘争から生まれる。のぼり続けていく頂点で強者には勝利が与えられ、強者は隷属させた家来でもって自らの力を増大させる。—テーオバルト、君は知っているだろう、どうして僕がいつもこの闘争を霊的(ガイスティッヒ)生活の中にも据えてみせるのか、そしてまた、あれやこれやの自然の寵児が占めるまさに秘密の霊的優位、彼が我がものとするのを許された支配が、彼にどんどん大きな勢力となるための養分と力をもまた与えると、どうして僕が大胆に主張するのか、その理由を。力と優位の備わる我々が下位の原理(プリンツィープ)に対するこの霊的闘争を戦い、かつこの原理を我々に隷属させるための武器は明白に与えられてあると僕は言いたいのだ。しかし、我々に知られるようになった手段によって、相手の中に侵入したり、我々の外にある霊的原理を我々の中に完全に引っ張り込んで支配する例のわざをどうして動物磁気(マグネティスムス)と名付けたりしたんだろうか。というのも、この命名では不十分だし、あるひとつの物理的に働く力から取り出された名前では、我々がこの術のもとに理解して知っていると主張するものが、むしろ全く言い表されてはいないのだから。」[14]

ここで「動物磁気」はその物理的な名称が不適切と批判されているが、その理由が、催眠状態、つまりラポールにおける魂同士の霊的結合、より正確には霊的支配がこの現象の本質であるとみなされているからである。ここでラポールとは、ダイモーン的に働く人間の魂による他者の魂の操作・支配と捉えることができる。人間がダイモーンのごとく振る舞うことができ、それが現実に効力もって現れるときの姿がラポールなのだとも言えよう。このように考えるならば、先ほど不可思議と見えた遠隔操作によるラポールも理解可能なものとなる。

ラポールによる支配という観点から物語の中のエピソードを拾い上げてみると、アルバンはマリアに働きかけて夢遊病のような状態に導き、ついには眼差しを注

[14] Bd.2/1, S.213.
[15] Vgl. Ebd., S.217.

いで強く望むだけで、彼女を催眠状態に導くことができるようになる[15]。シチリアの伯爵は睡眠中のアンゲーリカに働きかけた結果、彼女は、伯爵を愛してはいないとはっきり認識しているのに、伯爵に依存してはじめて生きることができると思いこまされてしまう[16]。彼女たちはともに、ホフマンが理想とする文学的手法さながら、現実と夢との境界を意図的にかき乱されて導かれた催眠状態の中で磁気催眠術師に隷属するように洗脳される。そうしたラポールの状態で彼女たちは磁気催眠術師の自我の中に引き込まれ、それと織り合わされた結果、ラポールの解消がこれに従属する存在に破滅をもたらすと見なされる。マリアの場合、磁気催眠術師とのラポールが強いために、もとの許嫁との結婚による精神的な結びつきは不可能であり、その不可能の表現が彼女の死となって現れる。アンゲーリカの場合は、磁気催眠術師である伯爵が妨げようとしたモーリッツとの結びつきの方が実は強かったために、この精神的関係が優先され、アンゲーリカの魂がモーリッツのそれと結びついている結果、彼女の存在と織り合わされた伯爵の方が自らの存在の基盤である肉体を去る形となって死んでしまう。

ラポールが支配と従属の関係に転用されるというのはホフマンの突飛な幻想と見えなくもないが、しかし催眠がとくに暗示のかかりやすく、意志の麻痺した状態であると一般的に認識される以上、この幻想が「動物磁気」を巡る実際の状況からかけ離れたものであるとは言えないだろう。ただホフマンの「動物磁気」にはダイモーン的である他にもうひとつ別の幻想が付け加わっている。というのも、引用した手紙の前半でアルバンは、人間の生存競争の結果としての強者への権力の集中という、いわば素朴な王権論の核心が「秘密の霊的優位」にあると見ているが、これは王権が崩壊した隣国フランスでコルシカの一貴族が皇帝にまでのぼりつめる不可思議を、ホフマンが「動物磁気」と結びつけたのに他ならない。そしてホフマンの磁気催眠術師が目指す支配の本当の目的は、アルバンの先の手紙の続きの中に次のように記されているのである。

「全ての霊的（ガイスティッヒ）なるものが集まる焦点こそが神なのだ！—炎のピラミッドをつくる光線（シュトラーレン）が多ければ多いほど—その分だけ焦点は近い！—この光線がどのような広がり方をしているだろう—この光線は自然全体の有機的生命体にとどいている。そして霊的なるものがもつ仄かな輝き（シンマー）によって、我々は植物や動物の中に、同じ力によって活性化された同志を見分ける。—あの支配を目指しての格闘とは神的なるものを目指す格闘なのだ。力をもつという感情はその強度に応じて至福（ゼーリッヒカイト）の度合いを高める。至福の一切合切を含めた最高のものが焦点にはある！」[17]

ここで「同じ力」とは「動物磁気」という名で表現される術のことを指してい

[16] Vgl. Bd.4, S.755.
[17] Bd.2/1, S.214.

る。この術に通じたものは、ラポールによって他者の魂を支配従属させ、この魂が浴する「光線」を自らのもとに集約することにより仄かに輝きでて、他の霊的存在である動植物からは区別されるようになるという。「自然全体の有機的生命体」に届く「光線」とは、むろん太陽の光のイメージではあるけれども、これはしかし先に『ヘルメス選集』からの引用で紹介した「造物主」としての太陽、あるいは神の創造的活動の流出する起点としての太陽が放つ、一種の神秘的な意味合いをもった光のように理解すべきだろう。この神である太陽が放つ光線を凹面鏡のようにして集め、凹面鏡の焦点においてミクロな太陽を創出することが、アルバンたち磁気催眠術師の目的として表明されている。凹面鏡はむろん焦点に光を集める性質があり、太陽からの光を集めるならば、鏡面の内側の焦点に小さな太陽をつくることができ、そうしたイメージがここでは「炎のピラミッド」に見立てられている。磁気催眠術師は可能な限りこの凹面鏡に近づこうとする。例えばアルバンはマリアに初めて出会ったときに、「マリアの内なる魂から私に向かって流れ来るすべての光線（シュトラーレン）を、私は凹面鏡（ブレンシュピーゲル）のように受け止めるべく努めた」[18] と語っている。このようにホフマンの物語における「動物磁気」とはラポールによる他者支配を意味し、この支配的ラポールが全被造物との間で取り結ばれるとき、その焦点に位置する存在は地上の神に等しくなると理解される。ここからは磁気催眠術師とナポレオンが相似的関係にあるのが見て取れるのである。

ところで、ホフマンは『磁気催眠師』執筆の頃シェリングの『世界霊について Von der Weltseele』（1798年）を読んでいた[19]。シェリングはこの書で、自然には運動を新たに喚起しつづけようとするポジティヴな原理と、常に制限を加えることでこの運動を根源へと循環的に回帰させようとするネガティヴな原理があると説明する[20]。この二つの原理からは、宇宙全体をシステムとして形成し、組織化するひとつの原理が理念として導かれるとし、シェリングはこれを「世界霊（ヴェルトゼーレ）」と呼んでいる。

「ポジティヴなるものそれ自身とは、絶対的に一なるもの、それゆえ、きわめて古い、いつの時代にも消えたことのない、原物質（ウアマテーリェ）（つまりはエーテル）の理念のことであり、この原物質は、無限のプリズムで分散されるようにして、（個々の光線（シュトラーレン）のとして）無数の物質の中に拡散する。世界における多様性はすべて、ポジティヴなるものが働くところの様々な枠を通して初めて出来する。地上における運動全般の要因がポジティヴなるものであり、これは外から我々の方へ流れくるもので

[18] Ebd., S.216.
[19] Vgl. Ebd., S.729.
[20] Vgl. Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling: Von der Weltseele. In: Werke. Auswahl in drei Bänden. Herausgegeben und eingeleitet von Otto Weiß, Leipzig (Fritz Eckardt) 1907, Bd.1, S.475f.

ある一方、ネガティヴなるものは我々の地球に属するのである。」[21]

シェリングは地上における様々な自然現象を、「絶対的に一なるもの」である「世界霊」に由来するポジティヴな原理の、地球というネガティヴな原理による制限ないしは限定であると規定する。光という自然現象のアナロジーにおいて、ポジティヴな「原物質」はネガティヴな「プリズム」によって分散されて「物質」として現れると説明される。同様に有機的な自然の生命現象もまた、「世界霊」に由来するポジティヴな原理と、物質のもつ様々な諸力をネガティヴとみる原理との総合と理解される。シェリングは生命現象を磁気の現象と等しいものとして眺めており、磁気が磁気に反応する物体に働きかけるように、「生命の流れは、たとえそれがどこから来ようとも、この流れを受ける性質を持った道具(オルガーン)に出会うと、この流れが出会った場所であるそれら道具に、生命活動を与える」[22]と述べている。シェリングは無機的な自然現象と有機的な自然現象を同じモデルによって説明することによって、このふたつの自然の間に連続性をみる可能性を提起する。そしてこの連続性を保証する一なる原理としてシェリングは「世界霊」を想定し、これの「流出」による同質の作用の結果として、世界全体をひとつの有機的連関のもとに理解しようとするのである。

アルバンの語る「光線」は「自然全体の有機的生命体」に届き、そして凹面鏡の焦点において神を再現するものであったが、この「光線」はシェリングの「世界霊」が放つ「生命の流れ」としての「光線」と基本的に同じ意味を持っていると考えることができる。分散化されて個々の「生命体」に届く「光線」が凹面鏡の焦点において集約されるならば、それは「原物質(エーテル)」としての「世界霊」を再現することになる。磁気催眠術師はみずからを凹面鏡そのものにすることで、この「世界霊」をアンテナで受信するように捉えようとするのに他ならないが、磁気催眠術師がラポールによって他者の支配に成功するとき、それは部分的ではあるが、「世界霊」そのものの存在を理念ではなく現実のものとして証明したことになるだろう。この意味でホフマンの「動物磁気」は、シェリングの『世界霊』もまた連なるところのヘルメス的伝統を、ラポールという現象を契機として、メスマーよりも神秘的な形ではあるが、近代的に表現しようとしたと理解されるのである。「動物磁気」という名称で名指される現象の本質は、アルバンが説明するように、単に医学的生理学的に利用されるべきものではなく、また磁気という物理現象にのみ還元されるものでもなく、有機的自然と無機的自然の両方を連関させつつ宇宙全体をひとつの有機的なシステムとして把握する可能性を開く鍵となる点にあるとホフマンは考える。そしてこの鍵を握る者が神的なるものを奪取するというの

[21] Ebd., S.491.
[22] Ebd., S.663.

は、単なるホフマンの夢想ではなかった。神的な焦点に位置するかのごとき存在が十八世紀から十九世紀にかけてのヨーロッパの転換期には一人いたのであり、ホフマンは「動物磁気」を巡る物語の背景に必ずこの人物、つまりはナポレオンを想起させるのである。

ホフマンとナポレオン

ナポレオンは同時代の文学者たちが抱いた「全ての幻想の焦点」[23] であった。フランス革命という混沌から出てきた個人が皇帝になるというその驚異的な現実は、これを理解しようとする様々な幻想の投影を可能にしただろう。ホフマンはナポレオンの政治的、軍事的成功の要因を神秘的に解釈して、これを磁気催眠術師の不気味な支配のわざと併置してみる。ナポレオンは「動物磁気」の秘密に通じて神的な焦点を奪取したのであり、この場所から世界支配を企んでいるのではないか。ナポレオンの不可思議な社会的上昇が「動物磁気」によるものであれば、それは宇宙全体が有機的に連関しあうという、ヘルメス的伝統に即した世界の理念が、ナポレオン個人をひとつの焦点として現実のものとなっているのではないか。こうした幻想が、「動物磁気」を巡るホフマンの物語の背景に必ずナポレオンとその戦争が描かれる理由としてあるように考えられる。神的なるものを巡るホフマンの幻想がナポレオンと磁気催眠術師という現象にパラレルに投影されているのだとも言えよう。

ところでホフマンは現実にナポレオンを見ている。そしてナポレオンの戦争がいかなるものであるかをもまた自分の肌で体験している。その体験からは、しかし神的なるものを巡る上記の問いを否定的に答える結論が導かれているように思える。この体験を詳らかにしてみよう。ナポレオンはモスクワに遠征してロシアの凍土に三十五万人の兵士を無為に失ったのちドレスデンに戻ったが、ここに1813年の８月25から27日にかけて、プロイセン・オーストリア・ロシアの同盟軍が総攻撃をしかけた。両軍あわせて二万五千の死傷者が出た戦いはナポレオンの勝利に終わったが、この戦闘の攻防の舞台となったドレスデンにホフマンはいた。街が砲撃をうけ多くの市民が死傷し、ホフマンの目の前でも榴弾が炸裂した26日の日を、彼は「人生で最も記憶すべき日のひとつ」[24] と日記に記し、またこの日彼はナポレオンを実際に目のあたりにした。29日にはホフマンは街の郊外に会戦後の様子を見に出かけて、頭や体の打ち砕かれた屍が野に広がる恐ろしい光景に接し、日記には「私がよく夢で見たものが私の現実となった」[25] と書き記している。

---

[23] Vgl. Rüdiger Safranski: E.T.A. Hoffmann. Das Leben eines skeptischen Phantasten. Frankfurt a. M. (Fischer) 2000, S.292.
[24] Bd.1, S.469.

また30日に彼が再び皇帝に遭遇したときには、「恐ろしい独裁者の眼差し」[26] とナポレオンを形容している。

先に紹介したホフマンの芸術的手法によるならば、何の変哲もない現実は作家の内面のフィルターを通して「見慣れぬ奇異な装い」をして表現されるのであった。ところが、たとえ凄惨なものであれ、夢の中の姿形が夢の世界で帯びていた輝きのまま、芸術家の働きかけがないのに現実そのものとして現れてしまったのであれば、それは、芸術家の内面が外部の現実によって浸食されたのと変わりがない。現実の方が芸術家の内面に、彼の意志とは関係なく入り込んできて、そして彼の夢を奪ってしまったのだ。だが、ホフマンはこの浸食を新たな芸術表現の動機へといわば変換する。神秘主義者が、神という外部の自らの内面への訪れを内的な啓示、つまりヴィジョンとしてみるように、ホフマンは夢に等しい現実の、彼の内面への侵入を、彼自身の芸術的な幻視体験の契機へと置き換える。ホフマンは自らの心の中に現れた驚異的な幻を、今度は現実と区別することなくひとつのヴィジョンとして描き出そうとする。彼は1813年の12月に、執筆中であった『黄金の壷 Der goldene Topf』を中断して（この作品は1814年に『カロ風の作品集』の第三巻に収められて発表されるが、『ゼラーピオンの兄弟たち』の中に収められた『幻 Erscheinungen』（1817年）と関係づけられており、二つの作品はドレスデンを巡る攻防をやはり作品の背景に持っている）『ドレスデン近郊の戦場でのヴィジョン Die Vision auf dem Schlachtfelde bei Dresden』と題する作品を書き始めてまもなく仕上げている（1814年パンフレットとして単独の発行）。その内容を冒頭から紹介してみると、

「野戦のために造られた小さな城の廃墟は煙を上げていたが、わたしはその上に立って、血を流した死体や瀕死の者たちで埋め尽くされた平野を見下ろしていた。断末魔のくぐもった喘ぎ、苦痛の呻き、絶望して猛り狂ったぞっとする怒号が、風を引き裂いていた。そして彼方では暴風のように、大砲の音が轟いて、なお満たされぬ復讐の思いを恐ろしくも告げ知らせていた。すると、薄い霧が平野に立ちこめ、その中に一本の煙の柱がぼんやりと浮かぶと、それはだんだんと濃くなってひとつの暗い姿形をとったかのように、わたしには思えた。それは漂いつつ徐々に近づいてきて、わたしの頭上高くに位置した。とたんに、戦場にあるものすべてが生気をおびて動き始めた。体をずたずたにされた人間たちが立ち上がり、血に染まった頭を上へとさしのべると、怒号はもっと猛々しくなり、嘆きの声はより恐ろしげになった。地の奥底から発せられたように奇妙な赤い輝きが一瞬空にひらめくと、東からそして西から、骨になった拳に剣を握り、それをあの暗い姿

[25] Ebd., S.471.
[26] Ebd.

に向かって突き上げながら、光る骸骨たちが長い長い列をつくって押し寄せてきた。(中略)『復讐だ—復讐だ—俺たちの苦しみを、血にまみれた殺人者、お前にも!』屍たちの血の滴る目から、骸骨たちの骨だけとなった眼窩から光線(シュトラーレン)が放たれ、それがゆらゆらと燃え上がる炎のようにあの暗い姿を照らし出すと—それは独裁者だった—」[27]。

そうして独裁者と彼に服従して死んだ者たちとの間で問答がなされ、死者たちが独裁者に向かって、至高なる存在を認め、その力による復讐を恐れよと脅すのであるが、独裁者は自分こそが至高なる者であって、復讐と死を与える力そのものであり、「わたしの上には何もない」[28] と言い放つ。独裁者が腕を遙か彼方まで伸ばして死者たちの上にかざすと、大地が割れて彼らはその中に飲み込まれてしまう。しかし、その裂け目からはまた血が濁流のように音を立てて溢れ出して緑の平野を染め、そしてこの血の海から一匹の竜が飛び立って独裁者に襲いかかり、竜の爪が彼の胸に深く食い入って彼を苦しめ、独裁者は助けを求める。するとこの時、上から、「まばゆく光り輝きながら光を放つ太陽、永遠なる運命の焦点」[29] から声が轟き、独裁者が非道にも侮り犠牲にした者たちから苦しみが生まれでて永劫に彼を苦しめると宣告する。独裁者が「冒涜し嘲って大地を捨てた」[30] ゆえに、彼は永遠に報いを受けなければならないと、「焦点」からの声は言う。

「堕落し邪悪なる者よ—大地(エアデ)はお前に安らぎを与えるお前の故郷ではない。なぜならば、お前が不遜にも嘲弄した人間のみが、この者が永遠の光(リヒト)によってくまなく照らされ(ドゥルヒシュトラーレン)、より高き存在(ザイン)へと向かってのぼってゆくときまで大地のふところで憩うのを許されているからだ。だがお前の存在は虚空の中で永遠の苦悩となるのだ。」[31]

ホフマンがこのパンフレットを書いた1814年の時点で、ナポレオンは独裁者として他者の生命を自由にし、その死の意味づけをさえ行う地上の神として振る舞っているとホフマンは見ている。このヴィジョンはナポレオンの傲慢を断罪するのであるが、そのための仕掛けとして出てくるのが、アルバンの手紙の中で表現されたのと同じ「焦点」である。アルバンは磁気催眠術を駆使して自らを凹面鏡の「焦点」に位置させることにより、神へと近づこうとした。一方で独裁者は、神的なるものを奪取したとの妄想を「焦点」によって断罪される。この「焦点」は上記

[27] Bd.2/1, S.479.
[28] Ebd., S.480.
[29] Ebd., S.481.
[30] Ebd., S.482.
[31] Ebd., S.481.

の通り「太陽」と同一化されてあるが、それはシェリングの「世界霊」が光源のアナロジーで表現されたのを連想させると同時に、『ヘルメス選集』における「造物主」としての「太陽」をも想起させる。そしてここで「太陽」はさらに死者を高次の存在へと引き上げる力の源として、つまり救済をもたらすものとしても描かれてある。そうした救済の条件となるのが大地とのつながりであり、独裁者は「大地を捨てた」ためにもはや救済されることがないと言われている。「大地」はシェリングにおいては「世界霊」に発するポジティヴな原理に制限を加えるネガティヴな原理なのであった。ホフマンにあってはこの「大地」は何を意味するのであろうか。ホフマンの別の作品を補助線として引くことにより考えを進めてみたい。

フォスフォルス—神的人間没落の神話

ヴィジョンと同時期に書かれた『黄金の壷』におさめられた神話的挿話には、シェリングが『世界霊』の中で描いた世界の反映が再び見て取れる。その中で「太陽」はポジティヴな原理として、また「大地」はネガティヴな原理として働いている。この神話を取り出して再現してみよう。始まりは以下の通りである。

「霊(ガイスト)は水面を見下ろした。すると水は動き、泡立つ波となって立ち騒ぐと、飲み干さんとして黒い喉をあけた深淵たちの中に、轟きをあげて落ちていった。花崗岩の岩たちは勝ち誇る勝者のように、ギザギザに縁取られたその頭を、谷を守るようにしてもたげた。やがて太陽は母なる懐の中にその谷を受け入れ、灼熱した腕のような光線(シュトラーレン)で抱きながら育て温めた。すると何もない砂の下でまどろんでいた千の胚が深い眠りから目を覚まし、緑の葉と茎を上なる母の顔の方へとさし伸ばした。緑のゆりかごの中で微笑む子供たちのように、芽や蕾の中で小さい花々が憩い、この花々もやがて母によって起こされて目を覚まし、母がこれらの喜ぶようそれぞれ千の彩りで色づけてやった光(リヒト)で自らを飾った。」[32]

この後太陽と大地の間で闘争が起きる。「深淵たち」から「靄」が出てきて、これが太陽の顔を隠そうとすると太陽は嵐を呼び寄せ「靄」を吹き散らす。再び太陽の「光線(シュトラール)」が谷の真ん中にある黒い丘の上に差すと、そこに「火の百合(フォイアリーリェ)」[33]が

[32] Ebd., S.245.

[33] Feuerlilie、学名 Lilium bulbiferum はヨーロッパに自生する百合の一種で、炎のような赤から暗いオレンジの間の色の花をつける。「雷薔薇(ドンナーローゼ)」とも呼ばれ、稲妻を誘引するので家の中に持ち込んではならぬとの迷信がある。この迷信にあるような光との親和性、炎を連想させる色を考慮して、ホフマンのテクストの中で「百合(リーリェ)」と同一視されるこの言葉を「火の百合」と訳した。Vgl. Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. hrsg. Hans Bächtold-Stäubli. unter Mitwirkung von Eduard Hoffmann-Krayer. Berlin 2000. Bd.5, S.1302.

生え出る。「光をもたらす者（ギリシア語、ラテン語ではルーキフェル）」はこの百合への「無限の愛」[34] ゆえに一条の光となって谷に降り立ち、そして百合からも求愛を受ける。彼が百合にキスをすると、しかし百合は炎を上げて燃え、その炎からは全く別の存在が生まれ出てしまう。この存在を大地からはい出てきた竜がつかまえて、その翼で包んでやると、それは再び「百合」になった。ところが復活した百合は毒の靄をまき散らして他の花々を死なせてしまうので、フォスフォルスは竜と戦いこれを打ち負かして大地の中に閉じこめ、百合を自由の身にしてやらなくてはならなかった。この後、フォスフォルスと百合は結ばれて、彼らは共にアトランティスを統治することになる。それから遙かに時が過ぎて百合の子孫である「火の精」は百合の娘である蛇を愛して、やはりまた自らの炎でこの蛇を焼き尽くしてしまうと、その灰からは別なる羽の生えたものが生まれ出た。愛するものを失った絶望故にユートピアの花々を灰にした火の精はアトランティスを追われ、炎と光を奪われて大地の中に閉じこめられる。そこで彼は、火の元素が再び燃え立ち、新たな存在として復活するまで留まることになるのだが、それは、精霊たちが自らの世界にのみ閉じこもって人間たちとは疎遠になり、人間自身も堕落して自然の発する言葉をもはや理解できなくなり、かつて住んだことのある自然と調和した世界についてのぼんやりとした憧れを抱くばかりになる不幸な時代が訪れてからのことである。火の精は大地に閉じこめられた後、自分のもとの状態の記憶を失うことなく、そして「自然全体との聖なる調和」[35] を保ったまま、自然との調和を失って堕落した人間たちの間に生まれ変わる。そして自らの罪の原因となった蛇と再会し、この蛇との間に生まれる娘たち三人が人間の男たちとそれぞれ愛によって結ばれて、彼らに「自然の奇跡への信仰」[36] が芽生えるとき、火の精はアトランティスへ帰還することができる[37]。

大地的なネガティヴな原理と光というポジティヴな原理との総合から花々という自然的有機物が生まれいずるが、百合は他の花々と比較してより多く光を、つまりフォスフォルスを求め、彼もまたとりわけ百合を愛して、次の引用に見るようにこれに「思考」という火花をもたらすことで没落させる。だが没落する百合は、「思考」ゆえに没落するものの、また「思考」ゆえに新たに復活し、上昇する可能性をもつ。フォスフォルスは百合を焼き尽くす前にこの運命を予言して言う。

---

[34] Bd.2/1, S.246.

[35] Ebd., S.290.

[36] Ebd., S.291.

[37] 結婚によって結びつくことで人間をユートピアへと導きつつ、火の精自らもまた故郷へと帰還するという構図は、パラケルススがその精霊論で描く救済の有り様を裏返しにしたものである。パラケルススによれば、精霊は人間と婚姻を結ぶことで、死後の消滅を免れ、魂を得て、人間と同様神の国に入る可能性を得る。Vgl. Paracelsus: a.a.O., S.55.『水の精、風の精、土の精、火の精とその他の精霊についての書』より。

「美しき花よ、わたしはお前のものとなるつもりだ。だがそうしたらお前は堕落した子供のように、父と母のもとを去ることになるだろう。お前は自分の遊び仲間がもう二度とわからなくなるだろう。いまお前とともにお前と同じものとして喜んでいる全てのものよりも大きく、強くなりたいとお前は願うだろう。お前という存在をまるごと元気づけるようにいま暖めてくれる憧れは、無数の光線(シュトラーレン)に分かたれて、お前を苦しめ苛むことになるだろう。というのも、思いがまたいくつもの思いを生み、わたしがお前の中に投ずる火花(フンケ)が燃え立たせる至高の喜びが絶望的な痛みとなるからだ。お前はその痛みの中で、また新たに、別なる姿となって芽生え上昇するために、没落するのだ—この火花こそが思考(ゲダンケ)なのだ!」[38]

「光をもたらす者(フォスフォルス)」は、フランクフルト版の注釈が示唆するところによれば[39]、ホフマンが知己を得ていたヨーハン・アーノルト・カネ（1773−1824年）の自然哲学の影響を受けて生まれたアイディアとされる。カネの自然哲学はゴットヒルフ・ハインリヒ・シューベルト（1780−1860年）にも影響を与え、その『夢の象徴学』(1814年）の中では同じフォスフォルスの名が人間そのものを意味し、この人間は物質世界を超越して存在する霊的な本性をもつものの、物質への愛ゆえに物質世界に没落している[40]。ホフマンの神話の中でフォスフォルスが百合への「無限の愛」ゆえに谷に降り立つという設定は、シューベルトのフォスフォルスの没落と同じ構図で眺められる。とするならば、ホフマンのフォスフォルスもまた霊的存在としての人間の、物質世界へ没落した姿とみなすことができる。この考察が妥当性を持つのは、カネの自然哲学もまたヘルメス的伝統を遡る形で祖型を持つという点による。つまり、『黄金の壺』におけるホフマンの神話もまたヘルメス的伝統に繋がっているのである。試みにその祖型を先に紹介した『ヘルメス選集』の中に求めてみよう。その第一書で万物の父である「叡智(ヌース)」は自分の似姿たる子として「人間(アントローポス)」を生み出す。そしてこの人間は天界にある「造物主」の創造を観察し自らも造物するのを父に許される。この人間の物質世界への没落は次のように語られている。先に用語を解説しておくと、父なる叡智はその生む力ゆえに男女の合わさった存在と呼ばれ、「フュシス」は「自然」「本質」「性質」の意味に理解される。

「14 そして、死ぬべき、ロゴス無き生き物の世界に対する全権を持つ者（人間(アントローポス)）は、天蓋を突き破り界面を通して覗き込み、下降するフュシスに神の美しい似姿を見

---

[38] Bd.2/1, S.245f.
[39] Vgl. Ebd., S.759f.
[40] Vgl. Gotthilf Heinrich Schubert: Die Symbolik des Traums. Heidelberg (Lambert Schneider) 1968 (=Faksimiledruck nach der Ausgabe von 1814), S.157f.

せた。フュシスは、尽きせぬ美しさ＜と＞、支配者たちの全作用力と、神の似姿とを内に持つ者を見たとき、愛を持って微笑んだ。それは水の中に人間の甚だ美しい似姿の映像を見、地上にその影を見たからである。他方彼は、フュシスの内に自分に似た姿が水に映っているのを見てこれに愛着し、そこに住みたいと思った。すると、思い(プーレー)と同時に作用力が働き、彼はロゴス無き姿に住みついてしまったのである。するとフュシスは愛する者を捕まえ、全身で抱きしめて、互いに交わった。彼らは愛欲に陥ったからである。

15 この故に、人間はすべての地上の生き物と異なり二重性を有している。すなわち、身体のゆえに死ぬべき者であり、本質的人間のゆえに不死なる者である。不死であり、万物の権威を有しながら、運命(ヘイマルメネー)に服して死ぬべきものを負っている。こうして（世界）組織の上に立つ者でありながらその中の奴隷と化している。男女(おめ)なる父から出ているので男女(おめ)であり、眠ることのない父から出ているので眠りを要さぬ者であるのに、＜愛欲と眠りによって＞支配されているのだ」。[41]

しかし人間の帰還すべき領域は、星辰の世界をも含めて物質的世界をすべて超越する神の内なる場所とされ、人間の神的な出自とそこへと帰還する使命が「認識(グノーシス)」されるべきであると、この書では説いている。神的人間の物質的世界への没落というこの「認識」をカネ、シューベルト、そしてホフマンが共有するとみることができる。叡智的なイデアを思い見ることのできる神的な人間は愛故に物質的世界に没落した。それゆえ、ホフマンの神話における百合と火の精の没落は、神的な人間であるフォスフォルスの没落をそもそもの始まりとしていると解釈できる。フォスフォルスが授ける「思考」は、物質的世界にのみ帰属することの否定と、物質的世界の上なる叡智的なイデアへの志向を百合にもたらすのである。これによって百合は、物質的世界を越える領域への上昇を望み、またそれゆえに苦しむことになる。

ただ、ホフマンはヘルメス的伝統に繋がる際に、神的な人間の物質界への没落というモティーフは受け継ぎつつも、『ヘルメス選集』の第一書の特徴をなすとされるグノーシス主義の、宇宙全体を悪しきものとみて人間の神的な起源を叡智的世界にもとめる姿勢をも共有しているとは言い難い。というのも、引用した第一書は人間の神的起源となる場所を、プラトンの『ティマイオス』のように星辰界とはせずに[42]、これをも越える叡智的世界に定めている。人間の神的起源とならんで、まずもってこうした反宇宙的二元論に立脚する点に古代的な「グノーシス主義」の本質があるとみなされているが[43]、ホフマンはこの反宇宙的二元論は

[41] 前掲『ヘルメス文書』、62-4頁。
[42] プラトン（種山恭子訳）：プラトン全集12（岩波書店）1993, 58頁参照。

共有していない。なぜならば『黄金の壺』の中にある「自然全体との聖なる調和」という言葉でもって、ホフマンは自然への信頼を寄せつつ自然的世界全体を善なる神的なるものとみなしているからである。フォスフォルスの大地的世界への没落はあくまでも自然的世界の枠の中で起こる、つまりはプラトン的な星辰界－これも神々ではあるが－からの没落をモデルとして、ホフマンは人間の中に霊と物質の二元的性質を見ようとしているのに他ならない。ヘルメス的伝統に則して整理するならば、イデア的な叡智的世界（コスモス）の下の階層レベルに感覚できる「世界（コスモス）＝宇宙」が存在し、この宇宙の最も上位のレベルである天界に太陽と星辰といった神々があって、この天界そのものは叡智的世界に依拠するのであった。そして万物の父である神、叡智的世界、天界、神々、ダイモーン、そして人間へと階層的秩序（コスモス）が構成されて、全ての存在は互いに連鎖するように結ばれあうものとして考えられていた。人間は天界を出自とする神であって大地的世界に没落している。神であるが故に叡智的なものを思い見る「思考」の「火花」を内に宿している。そして本来物質的な存在である百合は「思考」の火が点ぜられることによって、大地的世界を越え行く可能性を得る。また、この存在の連鎖から没落した火の精はいずれこの連鎖そのものの中に回帰する。それゆえ、ホフマンが『黄金の壺』の中で描く歴史的人間は、没落した火の精と同じレベルで存在し、火の精とともに存在の連鎖へと回帰する可能性をまずは持っており、この連鎖への帰属において自らの神的起源への帰還そのものが想起されることになる。言い換えるならば、ホフマンの歴史的人間は二重の忘却の罪を犯している。神的人間フォスフォルスは物質への愛故に大地的世界へ没落したのであるが、これは神的起源の忘却であり、歴史的人間はこの忘却の事実を忘却することによって、存在の連鎖そのものからも滑り落ちているのである。存在の連鎖は人間の神的起源を保証しているのであるから、まずは存在の連鎖へと回帰する必要がある。それゆえ、ホフマンは神話の中で、フォスフォルス－百合－火の精－人間という序列を設けて、存在の連鎖、つまりは「自然全体との聖なる調和」への回帰を歴史的人間の理想として掲げたと考えられる。この意味で、ホフマンの「認識」は人間の神的起源よりはむしろ自然との調和を対象としている。そしてこれを言い表しているのが、『黄金の壺』の最終部における主人公アンゼルムスの次の言葉である。彼が火の精の娘セルペンティーナと結ばれるとき、地の精から彼女に贈られた黄金の壺に「百合」が芽生える。彼は言う、

「セルペンティーナ！－きみへの信頼、愛が、ぼくに自然の最も内なるものを解き明かしてくれた。フォスフォルスがまだ思考の火をともす前に、黄金から、

[43] 筒井賢治：グノーシス 古代キリスト教の＜異端思想＞（講談社）2004年、184頁、ならびに、柴田有：グノーシスと古代宇宙論（勁草書房）1982年、44頁以下参照。

大地の根源的な力から芽生えた百合をきみはぼくにくれた－百合とは、あらゆる存在(ヴェーゼン)の神聖なる調和(アインクラング)の認識(エアケントニス)なのだ。そしてこの認識の中、最高の至福(ゼーリッヒカイト)の中でぼくは永遠に生きるのだ。－そう、ぼくという幸せなやつは至高なる(ダス・ヘーヒステ)ものを認識した－ぼくは、セルペンティーナ！きみを永遠に愛さずにはいられない。－百合の放つ黄金の光線(シュトラーレン)は永劫に褪せることはない。信頼と愛と同じくこの認識は永遠なのだから。」[44]

「百合」が「あらゆる存在の神聖なる調和の認識」なのであれば、この調和の根源にはシェリングと同じように「世界霊」を想定でき、また調和する世界の中で霊的な人間は大地的世界からこれを超える神的な起源へと帰還することが可能となるだろう。そして「世界霊」の統べるこの有機的世界における死と再生の循環的運動そのものを愛することができるようになる。さらにあらゆる存在が神聖に調和するのであれば、太陽の光が代表するポジティヴな原理と、大地が担うネガティヴな原理の双方が、この有機的世界の調和を維持するために必要とされるはずである。

ここであらためて『黄金の壷』の神話が織りなすイメージをもとにホフマンのヴィジョンを振り返るならば、「大地を捨てた」罪で独裁者が断罪されるその意味がよく理解される。そして神的なるものを奪取したとする独裁者の妄想がそこで何故に挫かれるのかも、この神話を参照することで明確になる。「わたしの上には何もない」という独裁者の言葉は、神的存在そのもの、人間の神的な起源、そして霊的存在としての人間を否定している。そうした神的人間が大地的世界へ生まれる意味自体を、忘却するのではなく否定している。それはフォスフォルスが持った、大地的なネガティヴな原理である物質への愛、自然への愛を蔑ろにする行為である。これによって独裁者は大地を捨て、「自然全体との聖なる調和」そのものを否定したことになる。それゆえ、独裁者はホフマンのヴィジョンの中で断罪されなければならないのである。独裁者の演ずる地上の神は、ヘルメス的伝統とつながりを持つホフマンの神話から眺めるならば、根本的な形容矛盾を孕んでいると言えるだろう。物質的人間の世界だけを霊的なそれから切り離し独立したものと考えるのは、人間の神的な起源と存在の連鎖を理想とする立場からすれば、倒錯以外の何ものでもないからである。

磁気催眠術師とナポレオン

この論における最初の問に戻ろう。ホフマンはナポレオンを「動物磁気」とい

[44] Bd.2/1, S.320.

う現象と関連づけた。それは何を意味するか。「動物磁気」はまずヘルメス的伝統の世界観である宇宙全体の有機的連関を解く鍵と見なされた。ホフマンはナポレオンの成功の要因に「動物磁気」を幻想として投影し、ナポレオンを神的なるものを奪取した者として眺め、それがヘルメス的伝統に特徴的な存在の連鎖のひとつの証明となると一旦は理解したように見える。それは磁気催眠術師が最後に一人勝利する物語である『磁気催眠術師』において顕著である。だが、『ドレスデン近郊の戦場でのヴィジョン』における独裁者としてのナポレオンは、『黄金の壺』で描かれるホフマンの神話における理想と根本的に背馳するがゆえに断罪されねばならなかった。ナポレオンは決して神的なるものを奪取した存在ではない。つまり支配という行為は神的なるものとは切り離されなければならないのである。それは同時に、ナポレオンと併置されるホフマンの磁気催眠術師たちがホフマンの神話に照らし合わせて、批判の対象となるのを意味する。彼らは動物磁気の操作によって自らを凹面鏡のようにして神的な焦点を再現しようとする点では、この世界に秘められた存在の連鎖とその根源にある「世界霊」の探究者ではある。だが彼らが他者の支配を目論むという点で、存在の連鎖の一つの証左となりうる動物磁気を悪用し、それによって独裁者と同じように存在の連鎖の中で支配という倒錯を行うのだと言えるだろう。アルバンは、ラポールによる他者支配を通して神的なる「焦点」を我がものとすることが「至福」であるとしていたが、アンゼルムスはこの同じ「至福」が「自然全体との聖なる調和」の「認識」であると言っていた。「支配」ではなく「認識」が「至福」なのである。「光をもたらす者（フォスフォルス）」であった人間の出自がそもそも神的なるものである以上は、神的出自をもつ別なる人間存在の支配の欲望は倒錯であり、一方で神的な出自を持つという自己認識そのものが「至福」となるのは明白であろう。「動物磁気」はヘルメス的伝統に根ざすホフマンの世界を現実世界とつなげるひとつの鍵なのであり、この鍵が本当に鍵として機能するか否かに「動物磁気」を巡るホフマンの関心はあったと言える。磁気催眠術師たちの手の中で、この鍵は機能しているかに見える。しかし彼らは、独裁者が自らの上側に何ものも認めようとしなかったように、「支配」への欲望を通じて「自然全体との聖なる調和」をも超出しようとしていると見なすことができる。それは自らの神格を星辰界の上に置くグノーシス的態度であり、ホフマンはこれに魅了されつつも、自然的調和の外側へと抜け出ていく点で、この態度を悪しきものであると眺めたと考えられる。

「百合（フォイヴリーリエ）」の花が太陽に顔を向ける様は光を集める凹面鏡そのものとちょうど同じ形となる。「百合」はホフマンの磁気催眠術師たちが目指す神的なる「焦点」の別なる表現である。「百合の放つ黄金の光線（シュトラーレン）は永劫に褪せることはない」。この「百合」が神的なる「焦点」、つまりは「太陽」という存在の連鎖の「焦点」を宿しているとの「認識」が「至福」なのであり、「動物磁気」を巡るホフマンの幻

想は最終的にここに辿り着くのである。

（了）